

平成20年度 経営評価及び意見について
(報告)

平成21年11月

国際児童文学館 経営評価委員会

国際児童文学館 経営評価委員会

委員長	須	田	寛
委員	須	藤	健一
同	中	村	桂子
同	原		昌

大阪府立国際児童文学館及び財団法人大阪国際児童文学館の平成20年度施設及び事業の経営評価並びに主な意見は次のとおりです。

記

1. 総合評価

評価区分 A 顧客満足度が高い

2. 国際児童文学館経営評価委員会での主な意見

(1) 事業目標の設定の仕方及び評価について

- ・事業及び施設経営に関する事業項目において、定性、定量、双方の面で高水準の達成度を実現しており、高く評価できる。
- ・とくに閲覧に関しては、利用者数が目標値の2倍、コピーも2倍近く、その他も含め、非常に活発な活動であった。その他の普及活動も、ほぼ100%達成と努力の結果が見られる。
- ・ただ、研究活動、海外との交流などの活動と図書館としてのサービス事業まで幅広く、本文学館の特徴は何か、どのような活動を主軸にしてどのような全体像をつくっていくのかというところが見えて来ない面がある。基本コンセプトが見えてくるとよいと思われる。
- ・読書推進のうえで、一般図書館・学校図書館との連携と協働も重要で、この面での事業と評価を補完することが望ましい。
- ・閲覧利用者数の年間目標値が、一つの館として少なすぎるのではないか。近郊の団体訪問など誘導できないものか。利用者数の増加になるし、将来への動機付けにもなる。

(2) 評価に関連して提起された課題

- ・廃止後（統合後）、文学館としての要望をまとめて強気に働きかけるべきである。既存の収集書と文学館からのものを区別（「文学館文庫」というかたちで）しておくこと。又、運営方法に文学館方式をとり入れさせること。再び新しい「文学館」が再興できるよう布石を打つべきである。

(3) まとめ

- ・他に類を見ない児童文学館として、移転後も、子どもたちが本から学び心豊かに育つ核となるよう、より広い活動を行い、財団の存在価値をより高めるよう一層の努力を求めたい。